

リヤドの魔術師

その日も、イブラヒムは彼の毛嫌いしている街、アル・バタを訪れていた。アル・バタは、リヤドの最も古い市街地であり、由緒があり今も銀行、官公庁のある中心地ではあったが、インド人街、フィリピン人街なども抱え、スラム化したところもあって、高級なイメージは全く無かった。セレブ、大富豪の仲間入りをしたイブラヒムにとっては全く肌が合わない下町だった。特に、夜の雑踏、喧騒には、とても耐えられなかった。ようやく逃げてきたインドの喧騒に引き戻されたような気がして吐き気を催すような時もあるくらいだった。

イブラヒムは、ホテルのプールで泳ぎ疲れてはいたが、愛車のBMW五五〇iを自分で運転してこのアル・バタを訪れていた。

そして、いつもの渋滞に巻き込まれ、いつものように腹を立てながら、その中を止む無くゆっくりと進んで行った。目的のビルの駐車場に車を入れた時には疲れ果てていた。そん

な彼が元気を取り戻すのは、部屋のドアを開けた時だった。

「イブラヒム様、いらっしやいませ。お待ちしておりました」

仕付けの良く行き届いた黒人のレセプション・ファニックが、そのまるでプロレスラーのようながっちりとした巨体を屈めてイブラヒムを丁寧に迎えた。黒い蝶ネクタイにタキシードを纏(まと)ったファニックは、西アフリカ・ベニンの出身だった。イスラム教徒である彼は、昨年、この部屋の主人である黒魔術師のアドゴニーと一緒にウムラー(メッカ小巡礼)のためサウジを訪れ、ウムラー後もそのままサウジに居座っていたのだ。

「イブラヒム様、今日はいかがなさいますか。また、アイボリー・コースが宜しいですか」

「ファニック、勿論、アイボリーだよ」

イブラヒムは、そう言つとポケットに忍ばせていた一〇〇リヤル(約三〇〇〇円)紙幣を丸めて、そつとファニックの手に握らせた。ファニックは、慣れたもので、それを確かめる

でも無くそのままポケットにすつと手を入れ、手を出した時には、もうそこには紙幣が無かった。ホールにはトープ服を着たサウジ人の客がたむろしていたが誰もそのやりとりには気が付かないようだった。

「イブラヒム様、いつも済みません。有り難うございます。それでは、ご案内させて頂きます」

ファニックは、そのホールを抜け、右の部屋へとイブラヒムを誘導した。

薄暗いその部屋には、アバヤを纏い、ヒジャーブで顔を覆った女性の客がたむろしていた。イブラヒムは、好奇心に満ちた、体中を舐め回すような視線を感じながら、ファニックに従い、その前を通り過ぎた。

次の部屋は一段と暗くなっていた。その部屋は二〇畳ほどの広さで、眼が慣れて来ると、一番奥に、一面に黒いビーズの刺繍が入った服を着た男が、絨毯の上に静かに座っているのが見えた。その男の前には、数本のローソクが置かれ、小さな火が灯っている。

「イマーム(導師)・アドゴニー、イブラヒム様をお連れしました。アイボリー・コースだそうですから、宜しくお願い致します」

ファニックは、そう言うと、イブラヒムを残し、部屋を出て行った。ファニックがドアを閉めると、ローソクの火とその火に照らされた周囲がほんの僅か見えるだけだった。

身を屈めたイマーム・アドゴニーの顔が、ローソクの火に下から照らされ、暗闇に浮き上がった。瞑想をしているのか、眼は固く閉じられ、色艶の良い黒い顔が光り輝いていた。頭には黒いターバンが巻かれ、全身、黒に統一されたその姿は、魔術師らしい神秘的な雰囲気を漂わせていた。

アドゴニーは眼を閉じたまま、手を差し出し、イブラヒムにローソクの前に置かれた絨毯に座るよう促した。

イブラヒムは、促されるまま、その絨毯に座った。目の前では、三角形に置かれた白いローソク二本とその真中に置かれた赤いローソクが、ゆらゆらと炎を上げて燃えていた。そ

のローソクの右には香炉、左にはコップ一杯の水が置かれていた。手前には、身を清めるための水が用意されていた。

イブラヒムは素早く、両手首、口、鼻、両肘、頭、耳、両足を洗った。終わると、全てが浄化され、疲れもとれたような気がした。

すると、急にアドゴニーの眼が開いた。その大きな瞳は、爛々と光り輝き、見開かれた目玉は黒一色の中にそこだけくつきりと白く浮き上がって見えた。鋭い、人を射抜くような眼だった。

「イブラヒム、お前の願いはわかっておる。今、わしが精霊を呼び出してやるから、その願いを叶えてくれるよう頼んでみる。きつと叶えてくれるだろう。安心しておれ。ただ、そのコップの水を飲み干して、香を焚いて待っておれば良い」

イブラヒムは、言われるままに、コップを手に取り、その水を飲み干し、香炉の蓋を開け、中の香を焚いた。そこには芳しい臭いが立ち込め、微かな太鼓、シンバルの音が聞えてきた。

アドゴニーは、呪文を唱え始めた。呪文、太鼓、シンバルの音が次第に速くなり、アドゴニーは立ち上がってリズムに合わせて踊り出した。やがて最高潮に達すると魔方陣の中に入った。入った途端に全身を震わせ倒れ、伏した。いつもの

ことではあったが、イブラヒムは、なかなかその瞬間に馴染めず気味が悪かった。

目覚めた時には、アドゴニーには精霊が乗り移り、全く別人になっていた。

「ここはどこじゃ、人界じゃろうな。我を呼び出したのはだれじゃ」

その押し殺したような、しゃがれ声は全くアドゴニーのものとは異なっていた。薄気味の悪い声だった。精霊は暫らく回りを見回していたが、ようやく目の前のイブラヒムを見据えた。

「汝、汝は何者じゃ。結界の中におる汝は何者じゃ」

イブラヒムの周囲は、精霊から見ると、何かで囲まれている、近寄り難くなっているようだった。それで、今にも、殺されそうな空恐ろしさから身が救われるような気がした。

「イブラヒムと申します」

「そうか、我は精気なり。我を呼び出したのは汝か」

「違います。イマーム・アルゴニーです。お願いがあつて、

イマームに呼び出して頂きました」

「そうか、して、その願いとはなんじゃ」

「次の先物取引に成功して一〇万ドルの利益を上げたいのです。是非、成功させて下さい」

「そうか、わかった。汝の願いをきつと叶えてやるう。うむ。汝の周りには黄金色の雲気がたなびいておる。信ずるところに従い投じよ。そして、ただ、我が姿を念じよ、」

「して、その代償はなんじゃ」

「イマーム・アルゴニーに、また、心ばかりのザカート(喜捨)をさせて頂きたいと思います」

「良い心掛けじゃ。汝は、きつと報われる」

そういうと、精霊の乗り移ったアルゴニーは、大きく手を広げ、そのまま、その場に崩れ落ちた。暫らくして、目を覚ますと、アルゴニーに戻っていた。

「イブラヒム、いかがであった。精霊は話を聞いてくれたか」

「はい、聞いて頂きました」

「そうか、それは良かった。それでは、二人で精霊にお礼を

言おう」

アルゴニーは、暗闇から大きな象牙を取り出した。それは、まるで男根崇拜の対象のような形をしていて、立派に光り輝いていた。

「それでは、わしに従って、じっくりと願いが叶うよう祈りながら、撫でてくれ」

イブラヒムは、アルゴニーに従って、その先端をいつものように撫で回した。

「よし、これで大丈夫じゃろう。それでは、お供えをしてくれ」

イブラヒムは、一万リヤル(約三〇万円)をそつとその前に置いた。アルゴニーは、それを手早く後ろにかたした。

「イブラヒム、この聖像は霊験あらたかだな。わしの客には女性が多いのだが、特に評判じゃ。これを用いて、わしの前で平気で淫らなことをする。目が当てられん。中にはわしを懇願するものもある。そうになると最後まで慰めなければならん。困ったものじゃ」

アルゴニーは、ニヤニヤと笑いながらそう話すと、じっくり

と喉を鳴らした。

イブラヒムにはアルゴニーが困っているようにはとても見えなかった。

「亭主に不満を持つ女性のいかに多いことか。もっとも、離婚成就や家族内のトラブル発生を願うケースも多いがな。そのような場合は、お前とは異なり、七〇〇〇リヤル以下のお供えで抑えてやっている。これはちょっと余計なことを言ってしまった。それでは、いつもの通り、別室でゆっくり楽しんでいってくれ」

そこで、ファニックが現われ、イブラヒムを別室に誘導した。

別室は、天国のようなところだった。イスラム宗主国で敬虔なモスレムの多いサウジではとても考えられない酒池肉林の館だった。勿論、それは違法なことで、見つければ厳罰に処せられる。しかし、いつも、緊張感に満ちて取引をしているイブラヒムには、最高の息抜きの場所だった。

ここでは、カモシカのように足が長く、まるでモデルのようにスタイルの良い白人や黒人の女性が多数控えていた。中には、フランス・パリのキャバレー“クレージーホース”に出演したことのあるスーパーダンサーも数人いた。彼女等は、皆大金持ちの贖身だった。イブラヒムもその大金持ちの内の一人だった。

イブラヒムは、右手に好みのバーボン、ワイルド・ターキーを入れたグラスを持ち、左手にスーパーダンサーの一人、モニカを抱いていた。モニカは、北アフリカの出身だから、源氏名に決まっているのだろうが、妙にその名前がピッタリといていた。濃い褐色の体は、全身エロチシズムに満ちていて、いつもイブラヒムの欲望をかきたてた。モニカの目は大

きかったが、どこか気だるそうで薄目を開けているように見えた。それが、一際、セクシーだった。

ワイルド・ターキーを飲み干すと、二人は連れ立って、モニカの部屋に行った。モニカの部屋の中央には、大きなベッドが置いてあり、二人はそのベッドの上に横たわった。

イブラヒムの日常は、セレブ、大富豪そのものだった。リヤドの超高級賃貸マンションであるアル・ファイサリアに滞在し、食事も、常に最高級のを味わっていた。朝は、ルーム・サービスで、昼、夜はホテルのレストランを利用した。食費だけで一日一〇〇〇〇リヤル(約三万円)は下らなかった。時計はロレックス・オイスター、靴はバリー、コートはアカスキュータムなどと好みは一流ブランドに偏っていたが、日本の銀座のように世界の一流ブランドが並ぶファイサリア・モールで最高級品を誂えることもあった。サウジ人は、香水が好きで、インド、アラブ系のものを主として使用していたが、イブラヒムは、フランスの一流ブランドを使用していた。

イブラヒムの金離れは良かったので、ホテル、レジデンスの従業員、ボーイなどからの評判は上々で、皆我先にとイブラヒムの用事に応えた。何所に行っても、イブラヒム様、イブラヒム様と呼ばけられた。

イブラヒムは、米国の大学で修士号を取ってから、最初はアメリカ銀行で働いていたが、企業買収、先物取引で大成功してからは、その魔力に取りつかれていた。運が良かったのか、目先が利いたのか、これまでは、大儲けはしたが、大損は無かった。企業買収では、企業は、安く買って、高く売るものという考えに、直ぐ馴染み、冷徹な判断でこれ进行处理した。情に流されることは一切無かった。その他、何事も、全て、投下資本に対する利益率で物事を処理した。金が全て、金があれば、何でも出来るという哲学は、早めに確立された。タイミングを逃さずに、損益を計算して迅速な行動を起こすには、迅速な計算を必要としたが、イブラヒムの計算は常に素早く正確だった。パソコンで複雑な式を駆使して、市場分析、市場見通しを作成するのは得意だった。また、暗算も得意で、インドの小学校時代に、既に二桁の掛け算は出来た。

そんな彼にすれば、サウジの金持ちに協力して、その資金をもとにして、大儲けをするなどはお手のものだった。利益率を常に二桁に保つ彼の手腕に、顧客は、皆満足していた。彼は、「ニュー・エコノミー」の旗手だった。イスラムでは、実態経済を離れた経済行為には二の足を踏む傾向があったので、それも、イブラヒムの活躍の場を広げることになった。顧客は、金だけを出し、口を出さず、儲けだけ待てばそれで良かった。内容は、むしろ知らない方が良い。

しかし、儲けは保証されたものではないから、投資をした時、特に大金を投じた時には、イブラヒムの胃はきりきりと痛み、常にストレスは溜まっていた。アル・バタ通いは、必須だった。

彼のお気に入り、モニカも彼を好きなようだった。しかし、イブラヒムは、それは、彼の金離れの良さがそうさせているのだと肝に銘じていた。イブラヒムは、自分は、並以上に魅力的な男だとは思っていたが、商売上の付き合いと恋愛とを混同することは決して無かった。金の切れ目が縁の切れ目と

空しく思うこともあったが、そこは冷静に判断していた。そろそろ縁談をと進めて来るものもいたが、イブラヒムにはその気はまだ無かった。恋愛願望も無かったわけではないが、男女交際に厳しいサウジでは問題が起きる可能性が高い。まごまごすると、死罪となる。それも一気に死ねる斬首刑ならまだ良いが、身分違いのものと恋に落ち、石打ちの刑にでもなったら最悪だ。土の中に体を埋められ、顔だけ出して、人々から辱めを受けながら、息絶えるまで石を投げつけられる。まるで地獄の責め苦だ。

それに、何よりも、まだまだ、アルゴニーの作った楽園の中で、モニカを抱いて、夢見る気分ではなかった。実際、イブラヒムとモニカは、いつも夢の国の中にいた。時には、魔法の絨毯も無いのに、絡み合って天空を飛んでいた。

モニカのベッドの脇には、黒檀のテーブルが置かれ、芳しい木の香りが漂っていた。そして、その上には、香炉が置かれ、香炉の中では、炭が赤々と燃えていた。モニカはその炭の上に、刻まれた草を載せた。草は勢い良く燃え上がり、辺りには白い煙が漂った。イブラヒムは、その香炉を取り上げると、モニカと一緒に、その煙を深く吸い込んだ。

途端に、イブラヒムの感覚は研ぎ澄まされ、体中が興奮して来るのを感じた。モニカもそうだった。辺りはバラ色に染まり、遠くに聞えていた太鼓の音が、黄色となって迫ってきた。シンバルの音は、青色に乗って聞えてきた。部屋の中は、ある筈の無い花や木で一杯になった。二人は完全な陶酔状態にあった。抑えようの無い高揚感の中にいた。

「グッド・トリップ(幻覚状態)。ああ、楽しいわ」

モニカは興奮してそう叫んだ。

イブラヒムは、興奮で震えているモニカの体を押さえた。しかし、熱く燃えたモニカの体は、一段と震えを増すばかりだった。そのイブラヒムの体も、興奮を抑え切れずに、震え、熱くなっていた。過敏になった二人の体は、ちよつと触れ合

っただけで、恍惚とした夢の世界の中に飛び込んだ。

「モニカ、モニカ、素晴らしいよ。何と素晴らしい景色だ」

「イブラヒム、もっと強く抱いて。体が破裂しそうよ」

イブラヒムは、モニカの体を固く抱き締めた。モニカが勢い良くのけぞると、イブラヒムの目の前にモニカの大きな乳房が飛び出した。イブラヒムが、その乳首を口に含ませると、モニカは喘ぎ悲鳴をあげた。

「イブラヒム、イブラヒム、もっと強く吸って」

モニカは、イブラヒムの頭を強く、乳房に押し付けながら叫んだ。

絡み合った二人の体は、また、天空へと飛び立った。

すべて終り、ファニックに誘導されて、表に出ても、イブラヒムには、後ろめたいところは微塵も無かった。時には、ふと、自分の不信心を悔やむ時もあったが、それは、稀なことだった。大金を儲け、好きなように使う、喜捨も充分なくらいしている。何が悪い。イブラヒムは開き直っていた。むしろ、イブラヒムは、貧乏人を毛嫌いしていた。インドでは、

金持ちそうな人間を見つけるとすぐに黒山のように乞食が回りを取り囲み、手を差し出して金をせがんだ。イブラヒムは、いつも、それを振り切った後に、まるで汚い虫と接したような嫌悪感を味わい、急いで体を洗ったものだ。そして、“奴等は人間ではない。ゴキブリだ”そう言い聞かせていた。

イブラヒムの乗ったBMWは、アル・バタを出て、高級住宅地、高級商業地区のオレイヤに向かっていた。帰りは、車も少なく快適だった。

交差点で信号待ちをしていると、真夜中だったが、汚れた服を纏った少女が寄って来て運転席のガラスを叩いた。そして、手を差し出した。その顔は、あどけなく可愛らしかった。円らな瞳がライトに照らされ、輝いていた。乞食を毛嫌いしているイブラヒムは、いつも反射的に要求を撥ね付けていたが、この時ばかりは、ふと可哀想になり、気紛れで一〇〇リヤル紙幣を掴ませた。普通一リヤル、せいぜい一〇リヤル程度しか貰えない筈の少女は、目を丸くして驚いていた。満面の笑みを浮かべながら、目には涙が溢れていた。

信号が青になり、車を勢い良く発進させたイブラヒムは、バックミラーを覗いていた。案の定、二二、三歳の男が出て来て、少女から、イブラヒムの与えた金を取り上げていた。

“馬鹿にしゃがって”そう言いながら、イブラヒムはアクセルを強く踏んだ。BMWは、一気に一〇〇キロを超えるスピードになった。少女らは、朝早くから夜遅くまで、交差点に立たされ酷使されているのだらう。悪い奴はこの世に腐るほどいる。このサウジも例外では無い。イブラヒムはそれを良く知っていた。彼等の中には、イエメンなどで少年、少女を誘拐して連れ帰り、働くだけ働かせているものもいる。一日に三〇リヤルも稼げはそれで良い。大きくなれば、客を取らせて、また儲ける。言うことを聞かなければ、お仕置きが待っている。少年の場合には、乞食に出るのを拒んだために沸騰した湯を掛けられて大火傷を負ったケースもあった。

巡り合せが悪い時は、そんなもので、次の交差点で、今度は、黒いアバヤを着た大人の乞食に出くわした。イブラヒムは、もう沢山だと思ったが、女は車の側に寄って来て手を差

し出した。黙っていると、今度は、売春を持ちかけて来た。イブラヒムは、溜まらず、黙って一〇リヤル紙幣を手渡した。“この売女め、乞食め、ごきぶりめ”イブラヒムはそう言っていると、アクセルを吹かして、その場を走り去った。

帰り道で気分の悪いことは多少あったが、レジデンスの自分の部屋に戻ると、イブラヒムは、心身ともにすっきりとしていた。アル・バタのイマーム・アルゴニーの黒魔術、モニカの豊饒な肉体、そして、幻覚を呼んだ細かく刻まれた草を思い出していた。イブラヒムは、その草がハッシッシ(大麻の一種)に違い無いと思っていた。

イブラヒムは、マルコ・ポーロの東方見聞録に記されている“山の老人”を想い起していた。若者達は、ハッシッシを吸って見た天国に再び行けることを約束されて暗殺者になった。イブラヒムには、若者達の気持ちがかかるような気がした。

一二世紀から二三世紀にかけて、イラン北部のムヘレットという山の奥地に、アラディオンという名の“山の老人”がいた。老人は、豪華な宮殿と庭園を持ち、そこに一二歳から二〇歳までの武術にすぐれた若者を集めていた。若者達はハッシッシを嗅がされて天国へと連れて行かれる。

天国には、あらゆる果樹に囲まれた、黄金の宮殿があり、ブドウ酒、決して腐らない牛乳、混り物の一切入っていない蜂蜜、そして決して濁ることの無い清浄な水が流れる川が幾つもあった。周りでは絶世の美女があらゆる楽器を奏で踊っている。若者達は、彼女等と心ゆくまで快樂に耽ることが出来た。さらに、美酒や珍味の限りを尽くし夢のような楽しみを満喫する。

しかし、若者達は、突然天国の外に連れ出され落胆する。

「お前たちはどこにいたのか」

山の老人は、若者達に問いかける。

「天国です」

若者達は答える。そして若者達は、天国でいかに楽しい暮らしをしていたのかを嬉しそうに語り始める。

「それこそが、ムハンマドが説いた天国だ」

山の老人は、そう教える。

それを聞いた若者達はその天国へと連れ戻される日を心待ちするようになる。

山の老人は時が来ると、天国を体験した若者たちを集めて

こう告げる。

「もう一度あの天国を体験したければ、これから言う高官を暗殺しさえすれば良いのだ。万一失敗して死んだとしても、必ず天国に行ける」

若者たちはその天国をもう一度味わうために、嬉々として山の老人の指令を実行する。まるでテロリストのように・・・

山の老人はこのようにして若者を暗殺者に仕立て上げては、周辺の国々を脅迫し服従させていたという。しかし、一三世紀には、チングス・ハーンの弟フラグ・ハーンの攻撃を受けて山の老人の庭園は滅ぼされてしまう。

一般に、敬虔なモスレムは、天国に行くことを願い、戒律を守り善行を尽くす。モスレムにとっては、現世より来世がより重要なのである。

イブラヒムは、既に天国を存分に楽しんでいたが、誘惑に惑わされ易く、決して敬虔とは言えない自分は、将来、天国

に行けないかも知れないと思い、ふっと不安になることがあった。大盤振る舞いをして気前良くしているのには、その不安から少しでも逃げたいという気持ちもあった。